

一同六盃半

其座に倒れ、餘程の間休息致し、目を覺し、茶碗にて水十七盃飲む。

小石川春日町 天堀屋七右衛門 三十  
五十三

一五升入井鉢にて壹盃半

直に歸り、聖堂の土手に倒れ、明七時迄打臥す、

一五合入の盃にて拾壹盃

跡にて五大力をうたひ、茶を十四盃飲む、

一三合入にて貳拾七盃

跡にて飯三盃、茶九盃、玄んくを躍る、

一壹升入にて四盃

跡にて東西の謠をうたひ、一禮して直にかへる、

一三升入にて三盃半

跡にて少の間倒れ、目を覺し、砂糖湯を茶碗にて七盃飲む、

右之外酒三四四十人計り有之候へども、二三升位のもの故不記之、

〔三養雜記二〕對酌奇事

天保二年のこと、かや、讃岐國高松なる津高屋周藏といふものあり、生れえたる大酒なれども、常には人なみに肴をまうけて對酌すれども、いざ飲まんとおもふときは、玄米に生鹽を肴として飲むほどに、その數量いくらといふを乞らずといへり、ある時かの周藏が檀那寺へ、日蓮宗の僧來りていふやう、われば肥後の熊本の者なるが、かねぐ傳へうけたまはりしに、この地に津高屋周藏どのといふ人、玄米に生鹽を肴にして、大酒せらるゝのよしき、及べり、いよくさやうに候はゞ、願はくは我らその周藏どのに逢ひて、酒を飲くらべ試たしといふに、さいはひその

本所石原町美濃屋儀兵衛 五十一  
四十七

金杉伊勢屋傳兵衛

山の手藩中之人  
六十三

明屋敷の者